



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	夏目漱石の『こころ』における嫉妬の構造( fulltext )
Author(s)	荒井,洋一
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. II, 61: 215-226
Issue Date	2010-01-00
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/107221">http://hdl.handle.net/2309/107221</a>
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

## 夏目漱石の『こころ』における嫉妬の構造

荒井洋一  
(哲学倫理学分野)

### 要旨

夏目漱石は、我が国におけるもっとも偉大な作家のうちの一人である。ことに、彼の代表作『こころ』は、ほとんどすべての高等学校の「国語」の教科書に、部分的にせよ、載せられているらしい。

私は、私のかつての論文「ジェラシー」『東京学芸大学紀要』二一三四、一九八三年にもとづいて、夏目漱石の『こころ』における嫉妬の構造を分析しようと思う。私の論考は次のように進む。

- 1 プロローグ
- 2 「先生」はなぜ自殺したのか
- 3 Kはなぜ自殺したのか
- 4 「先生」は本当はなぜ自殺したのか

キーワード：愛、嫉妬、自殺

### I 序言

ここでは、夏目漱石（一八六七—一九一六年）の晩年の作品『こころ』（一九一四年）をフィールドにして、その中心テーマとされる嫉妬の問題を哲学的に分析しようと思う。

夏目漱石は、近代以降、現在に至るまでの日本の作家の中でも最重要と評されるようである。その夏目漱石の作品の中でも『こころ』は最もよく読まれているらしい。高校の国語の教科書にも、ほとんど例外なく、その一部は収録さ

れているという。海外にも多くの翻訳により伝えられていて、E. マックレラ  
ンによる英訳 Kokoro は多くの版を重ねているとのことである。

私がかつて以下の論文を書いた。

「ジェラシー」『東京学芸大学紀要』2134、一九八三年。

そこで得られた知見を応用すると、このたびの試みからはいささかの成果が  
得られる。

「嫉妬とは何か」を明らかにするために、この作品は日本人、ならびに日本  
文学を愛好するすべての人々に対して、最適の材料を提供してくれると期待さ  
れる。

夏目漱石には深い思想性も備わっており、論理的、哲学的に分析することが十分可能である。そのため諸外国後に翻訳することも容易と聞く。

彼には、信じる働きの意味について、また「真の愛」についての深い洞察がある。

けれども、他方、『こころ』の中心問題として、Kの自殺が描かれており、その、いわば道徳的・道義的な責任の帰結として、「先生」の自殺もまた用意されていることも事実である。

はたして、Kの自殺と、「先生」の自殺とは、嫉妬の構造からは論理的に正しく導かれるであろうか。

この点について、私は、以下の論考において、検討してみたい。

主な登場人物は、「先生」（四十歳くらい）、「私」（二十歳くらい）、「先生」の妻の「静」（三十歳くらい）、「静」の母親の「奥さん」（軍人である夫をなくした未亡人）、そして「先生」の親友Kである。

作品は、上巻「先生と私」、中巻「両親と私」、下巻「先生と遺書」から成り立っている。

## Ⅱ 「先生」はなぜ自殺したのか

この点は、一見、明らかであるように見える。

一応は次のように言える。

「先生」は嫉妬に駆られて、Kの恋路を妨害するために、策略を講じた結果、はからずも、親友であるKを、自殺にまでも追いやってしまったのである。その自責の念から、「先生」もまた、ついには自殺したのである。

それは一体どのようにしてであったろうか。

ひとまずは、この作品の表層をたどってみる。

初めに「私」の側から語る。

「私」は鎌倉で海水浴をしていて、「先生」と出会う。何が「私」をして「先生」に引き付けさせたのであろうか。脱衣所にて「先生」の眼鏡を拾ったことがきっかけである。それは単なる偶然だったのか。それとも「私」にとり「先

生」は精神的な父のような存在に見えたのか。「私」はたびたび美しい奥さんと二人でひっそりと暮らしている「先生」宅を訪問するようになる。「先生」は雑司が谷の墓地に——そこにはKが眠っていることが後に分かる——墓参りに出かける他は、ほとんど外出もしない（上）。

「私」は大学を卒業して郷里に帰る。長く腎臓を患っていた父が病院で危篤になる頃、一度会いたいという「先生」からの電報が届く。東京に帰るに帰れないでいるうちに、今度は分厚い書留が届く。開いてみると、「この手紙があなたの手に落ちるころには、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」とある。「私」は母と兄宛に簡単な手紙を書いてから、「思い切ったいきおいで東京行の汽車に飛び乗ってしまった。私はこうこう鳴る三等車の中で、また袂から先生の手紙を出して、ようやくはじめからしまいまで目を通した」（中一八）。

「こうこう鳴る三等車の中で」の表現はまことに効果的である。親しい友人や親族などの自殺の報に接したときの、私たちの心の中では、いつでも、このような轟音が響くことであろう。

けれども、この展開には少しの違和感もある。

それは「私」のとった行動に関してのことである。

ここで、少しだけこの作品の表層から深層へと掘り下げてみよう。

「私」はこのようにして、今、目の前にいる瀕死の父よりも、すでにもうこの世にはいないと思われる「先生」の方を優先する。それは、父の場合は自然死であるのに比べて、「先生」の方は自殺という異常死であるからだろうか。

「私」はその異常死を自然死よりも重大視したのだろうか。けれども、よく考えてみると、「先生」の死は近過去の出来事であるのに比べて、父の死は近未来である。本当なら、もはや手遅れとなった「先生」の近過去の死よりも、「私」は近未来の父の死を優先させて、その臨終の場に立ち会うべきだったのではないだろうか。

死は絶対の、一度限りの出来事である。身近な人、大切な人が亡くなる時には、人はすべてを投げうってでもかけつけてやりたいと思うものではないだろうか。「私」の場合、最愛の父が臨終の場面を迎えようとするときに、常々

尊敬する「先生」からの重大な手紙に接したためとはいえ、その場をはずして汽車に飛び乗ったのは、寂しい、親不孝なことではないのだろうか。

大切な人に見守られながら息を引き取ることは大きな幸せである。大切な人に見守られて、人は旅立つことを望むのである。「私」はなぜ、父が最後の闘病をしている病室に留まり、その手をあたたかくにぎりしめなかったのだろうか。

それとも、それは残された唯一の遺族である静を見舞うためだったのだろうか。確かに、静には大きな衝撃を与えていたことだろう。

次に「先生」の側から語る。

一人息子の「先生」は二十歳になる前にチフスで両親を亡くする。その後、信頼して財産の管理を任せていた叔父が財産を使い込む。「先生」は人間不信におちいるが、法的に争うことまではせずに、残された遺産の整理を別人に託してから、郷里の新潟を去り、東京に出る。東京では或る母子家庭の家に下宿して大学に通う。そこには軍人の夫の未亡人である気丈な「奥さん」と、その美しい一人娘の静とがいる。「先生」は後に大学を卒業してからも、職業を持たずに、遺産で生活することができる。

ここで、また、少しだけこの作品の表層から深層へと掘り下げてみよう。

彼女の名前「静」はどこから取られたものだったろうか。

よく指摘されるように、乃木大将の妻の名は静子である。

「先生」は『こころ』の中で、明治の精神は明治天皇と共に始まり、明治天皇と共に終わった（明治天皇崩御、明治四五年七月三〇日）と言い、乃木大将の殉死を知って、自分も死ぬ覚悟を固めたと言う（下五六）。

乃木希典（まれすけ）の辞世の歌。

うつし世を

神さりましたし 大君の

みあと したひて 我は ゆくなり

彼の自刃は大葬の日、九月一三日の午後八時のことと言う。それは、明治天皇の棺を収めた車が宮城を出て、青山の葬儀場に向かう折、号砲が鳴らされた時刻であった。享年六四歳。

他方、彼の妻・静子もまた辞世の歌を残している。

出でまして

かへりまず日の なしと聞く

けふの 御幸（みゆき）に 逢ふぞ 悲しき

乃木希典には漢詩の素養があり、立派な作品を残しているが、歌の方はどうであろう。

中西進は乃木希典と静子の歌を比較して、後者のできばえの方がまさっている」と評する（『辞世のことば』中央公論社、一九八六年）が、私も同感である。

一説によると、静子の死は無理心中との推測もあるようだが、中西によると、この歌のできばえを見ると、その推測は当たらない。彼女の享年は五六歳。

さて、それでは、「静」の名は「静子」から取られたものであろうか。

私は、ここで、何の脈絡もなく、ふと、静御前の歌を思い起こすのである。

歌われた場所は、「私」が「先生」と初めて出会った鎌倉である。

歌われた時はというと、それは、この作品が書かれた頃からさかのぼって、七三〇年ほど昔の、一一八六年のことであり、当時の最高権力者、源頼朝により命じられ、鎌倉の鶴岡八幡宮にて、舞いつつ歌われたものとされる。

しづや しづ

しづの をだまき くり返し

昔を今に なす よしもがな

一体、どのような白拍子の舞であったろうか。

それはわからないが、歌の方は、聞けば聞くほど、悲しい響きが伝わってくる歌である。

「しずの布を織るおだまきから糸が何度も何度も繰り返して繰り返されるよ

うに、昔を今にすることができたなら、どんなにか」。

その深い悲しみが、どこかしら、若い日の漱石が経験した愛の悲しみに通じるような気がする。

江藤淳によると、漱石は、かつて、兄嫁の登世に恋をしたという。彼女は若くして亡くなってしまった。

人間がこの世に生まれてくる意味は何だろうか。

「今」から思えば、あの時こうすればよかった、ああすればよかったと思うことはできるにしても、「過去」はけっして、思い出以外の形では、今に帰って来ることはない。人間が晩年を迎えたとき、「過去に生きる」ことはできるにしても、それは、実際には、ただ単に、老人が後ろ向きに今を生きているのに過ぎないのであり、いわば、記憶の博物館をさまよっているに過ぎないのである。彼は、けっして、過去に実際に立ち返って、過去を現在として生きているわけではない。記憶の博物館をいくらさまよってみても、過去に出会った人々は、けっして思いがけない行動を起こすことはなく、過去の行動を、まるで映画のように、繰り返すばかりである。

Kは「先生」と同郷の、新潟県の出身である。浄土真宗のお寺の次男として生まれたので、医者之家に養子に出された。学資の援助を受けつつ、東京で医学を学ぶことを期待されるが、Kはもともと宗教や哲学に関心が深く、東京で、実際には、医学の勉強をしない。このことが、ついに、養家に分かり、彼は大学の一年生のときに、またもとの実家に戻されてしまう。実家でも勘当同然となる。そこで夜学の教師をしつつ学資を稼ごうとするが、無理が重なり健康を害し、ノイローゼ気味となる。

Kの宗教性とは、他力本願で、肉食妻帯を許容する浄土真宗とは異なる、自力本願の禁欲的な傾向性を持つものであった。Kは手首に数珠をかけ、聖書も読み、自己の鍛錬と精進を第一義としていた。夏休みに、千葉県を旅行中に、「先生」に対して「精神的に向上心のないものはばかだ」(下三〇)と語るK。

後に、「先生」は、嫉妬に駆られて、一計を案じ、Kをして静から手を引かせるために、上野で、この言葉をキーワードにして、K自身の言葉をKに投げかける(下四一)。「道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の

第一信条」(下四二)。恋は道の妨げになる(下四二)。

「先生」は、そもそものは、Kに同情し、「おぼれかかった人を抱いて、自分の熱を向こうに移してやる覚悟で」(下二三) Kを自分の下宿先に引き取る。

「奥さんはよせと言いました」(下一八)。「私のために悪いからよせと言います」(下二三)。

Kは中学校でも、高等学校でも「先生」よりも成績が優秀だった。「先生」には「平生から何をしてKに及ばないという自覚があった」(下二四)。

或る日のこと、「先生」は神田での用事を済ませて、いつもより遅くに帰宅すると、格子戸をがらりと開けたときに、静の声を聞く。それはKの部屋から聞こえたような気がする。すぐに格子戸を閉めると、静の声はやむ。「先生」が靴紐を解いている間、静の声もKの声もしない。「先生」は変に思う。もしかしたら勘違いか。でも、いつもの通り、Kの部屋を通り抜けて、自分の部屋に行こうとして、ふすまを開けると、「そこに二人はちゃんとすわっています」。「Kは「今帰ったか」と言うし、静も「お帰り」と言う。「私には気のせいかその簡単な挨拶が少しかたいように聞こえました」。「奥さんは」と尋ねると、「はたして留守でした」(下二六)。

「今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう十分にきざしていたのです」(下二七)。

このあたりの心理の描写はまことに見事であり、読み返すたびに、その完成度の高さに感嘆させられる。

私はかつて以下の論文を読んだことがあり、その論文の特色のうちの一つは大変にリアルなジェラシーの場面設定にあるが、それでも、上の漱石の嫉妬の場面の描写ははるかに精彩に富み、段違いに生き生きと言えらる。

Daniel M.Farrell: "Jealousy", *The Philosophical Review*, LXXXIX, No.4, 1980.

「こころ」の他の場面も含めて、「先生」の心中を推し量ると、ジェラシーに特有の、驚き、不安、恐れ、悲しみ、落胆、空しさ、怒り、苦しみ、絶望、後悔、疑惑、迷い、劣等感、不信任感、焦り、憂鬱……など、実に多くの情念がせめぎあい、渦巻いているように見える。

Kから静への恋を告白されたとき、「その時の私は恐ろしさのかたまりといましようか。または苦しさのかたまりといましようか、なにしろ一つのかたまりでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に堅くなったのです。呼吸する弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです」(下三六)。

### Ⅲ Kはなぜ自殺したのか

それは、ひとまずは、Kの生き方を根底から基礎付けている彼の宗教観や哲学から来るものと見える。

Kの宗教観とは、前述したように、他力本願で、肉食妻帯を許容する浄土真宗とは異なる、自力本願の禁欲的な傾向性を持つものであった。

後に、「先生」は、嫉妬に駆られて、Kをして静から手を引かせるために、上野で、Kの言葉「精神的に向上心のないものはばかだ」(下三〇)をキーワードにして、K自身に対して逆に語りかける(下四一)。

もともと「道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条」(下四二)。恋は道の妨げになる(下四一)。ところがKは静に恋をしてしまう。そして、そのことをまず「先生」に打ち明ける。それは、なぜかという、Kが「先生」を無二の親友と信じていたからであろう。「先生」の方はというと、そのような強い信頼、深い信頼を、いわば逆手にとって、常日頃のKの信条をKにじっくりと思い起こさせつつ、Kをしいに自己矛盾の境地に追い込む。

けれども、その後、すぐには、Kは自殺などしない。

表面的には、Kは「先生」に静をとられたことにより自殺したように見える。

けれども、その前段階として、Kは、みずからの生き方の第一信条に反して、いわば「道ならぬ恋」をしていたことに、「先生」によって、はっきりと気づかされることにより自殺したようにも見える。

さらにまた、もしかしたら、Kの自殺の一因には、無二の親友と信じていた「先生」に裏切られたの思いも含まれていたようにも見えるのである。

「先生」がKに先駆けて、奥さんに「お嬢さんを私にください」と申し込ん

だことを、五、六日後に、奥さんがKに話すと、Kは「変な顔」をした(下四五)。Kはその知らせを「最もおちついた驚きをもって迎えた」。奥さんが「あなたも喜んでください」と言うと、「彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑をもらしながら、『おめでとうございませう』と言ったまま席を立った」。

この間のやり取りを読み返すと、Kの自殺はKの無垢な人間性から来るものとも見える。

けれども、彼の宗教観、または哲学からはどうか。

一体、Kの宗教観、または哲学からは彼の自殺は論理的に、また道徳的にも、正しく導かれるものであろうか。

Kの自殺の仕方はまことに凄惨な、むごたらしいものである。

それは、はたして「果断」(下四四)と言ってよい行為であろうか。それとも、むしろ「無慮」ないしは「暴挙」と呼ぶべき行為ではないであろうか。

Kは真夜中に、自室で、ナイフで頸動脈を切って自殺したのである。「私の目は彼の部屋の中を一目見るや否や、あたかもガラスで作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ちすくみました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたあきました。もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をものすごく照らしました。そうして私はがたがたとふるえだしたのです」(下四八)。

漱石はかつて自殺者を直接に見たことがあるのだろうか。

現代日本でも、毎年、三万人以上もの人が自殺しているほど、日本は、いわば自殺大国であるので、漱石の生きていた時代においても、直接・間接に、自殺者に接する機会があったのだらうと推測される。

もしもそうでなければ、このような異様な、非日常の、リアルな言葉は書けなかっただらう。

これは、自殺ということが何であるのかを知っている人の語る言葉であらう。

きわめて鋭角的で、まがまがしく、強烈な表現に満ちている。

私は東京学芸大学において、高校生時代や大学生時代に、友人の自殺に接した学生の手記を収集しているが、そこには、若々しくはあるにせよ、上の漱石の文章に似た、強烈な表現がはつきりと認められる。

以下に、その文章の一部を示す。

「死ということが何であるのか、自殺ということがどういふことであるのかをそれまで私は知っていたような気持ちでいたが、実はまったく知らなかった」。

「どうしてその時に気付いてあげなかったのか……という後悔は私に一生付きまとうだろう。でも今はもうこの後悔と付き合っていく決心ができていく」。

「私は、放課後に、クラスのみんなが携帯で緊急に招集された教室に行くのがいやでした。とうとう講義棟に着き、暗い階段を一段ずつ昇りながら、踊り場で一回転したとき、一瞬、目がおかしくなるほどの強い夕日が届いてきました。それはものすごくまぶしい光で、目を刺し貫いて直接、脳にまで届いてくるような、これまでに見たこともないような強い強い夕日でした」。

私がKの自殺におぼえる違和感は二点ある。

第一点は、付随的な、外面的な違和感である。

なぜKは自室で、頸動脈を切るといふ、激烈な自殺の方法を選んだのであろうか。残された人々の受ける衝撃や迷惑も考えずに。

血しぶきが飛び散った室内は二度と平静には使えないだろう。現に奥さんやお嬢さんは「先生」と共に引越しているのである。

飛び降り自殺も飛び込み自殺も、周りの迷惑が眼中にないとの点で同様である。

Kはなぜ、同じ自殺するにせよ、後に残される人々の心の傷を和らげるため、下宿先をすみやかに引き払い、連絡先などは一切告げずに、どこか遠方に旅立ったように見せかけつつ、その遠い旅先にて、身元不明の旅人としての死を慎重に計画しなかったのだろうか。そうすれば、彼の死は、残された人々に一生、知られることはなく、彼らは、もしかしたら彼の死を時に想像することはあるにせよ、その想像を結局は確定することはできずに、どこかで元氣

に暮らしているだろうと気休めをしながら平穩に生きていくことができたろうに。

でも、それでは「こころ」のストーリーが壊れてしまうのか。

Kはごく簡単な遺書を残している。

「自分は薄志弱行でとうてい行先の望みがないから、自殺する」と。

その他には、今まで世話になった「先生」へのお礼と、死後の片付けの依頼と、国もとへの連絡と、奥さんへの詫びが記されているのみである。

すなわち、そこには、「先生」に裏切られ、抜け駆けをされたことへの恨みの言葉などは一切記されてはいないので、「先生」は、いったんは、ほっとする。

でも、まさに、Kは、「先生」の目の前で自殺することによって、言葉によってではなく、行為それ自体によって、「先生」を暗に告発しているようにも見える。

かといって、遠い旅先での首吊り自殺や富士山麓の樹海入りも含めて、周りに迷惑をかけない、最も理想的な自殺法など本当にはないと私は思う。

私が考えるKの最も望ましい行動とは、けっして、遠い旅先で、人知れず自殺することではなく、下宿先を引き払い、一切の連絡を絶つた上で、別天地で堂々と、その命が尽きるまで、世のため人のため、また自分自身のためにも、生きぬくことである。場合によっては、仏門に入ってもよいだろうし、暖かい九州で自給自足の生活を試みてもよいだろう。

第二点は本質的な違和感である。

はたして、Kの宗教観や哲学から自殺は正しく導かれて来るのであろうか。

Kはふだん、聖書にも親しんでいたようであるが、キリスト教では自殺は大きな罪とされている。

人間の命は、根本的には、神からの賜物なので、私は他者の命を傷つけてはならないばかりでなく、私自身の命といえども、けっして、みだりに傷つけてはならないとされるのである。

ことにカトリックでは、自殺は、命を与えてくださる神への大罪であるとの

立場から、自殺者と自殺者を出した家族に対して、過去には厳しい対応をしてきた歴史があり、これは今日、反省されているくらいである。

「この世界の複雑な現実と、人間の弱さを考えるとき、わたしたちは自殺したかたがたの上に、神のあわれみが豊かに注がれるであろうことを信じます。……この反省の上に立って、これからは……遺族のために、心を込めて葬儀ミサや祈りを行うよう、教会共同体に呼びかけていきたいと思えます」（日本カトリック司教団『いのちのまなざし』カトリック中央協議会、二〇〇一年）。

それでは仏教ではどうであろうか。  
 仏教でも、他力本願であれ、自力本願であれ、安易な自殺は禁じられていることと推測される。

#### IV 「先生」は本当はなぜ自殺したのか

「先生」には、「愛とは何か」についての深い理解があるように見える。  
 それは、次の文章からも十分にうかがえる。

「私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかもしれませんが、私は今でも堅く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものではないということを堅く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持ちがしました。お嬢さんのことを考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移ってくるように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が働いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点をつらまえたものです。私はもとより人間として肉を離れることのできないからだでした。けれどもお嬢さんを見る私の目や、お嬢さんを考える私の心は、まったく肉のにおいを帯びていませんでした」（下二八）。

上の文章は、以下の(1)と(2)との密接な関係性に触れたものであろう。

(1) 「先生」は静を愛する。

(2) 「先生」は静を信じる。

もしも「先生」が静を愛しているとすれば、「先生」は必ずや静を信じているに違いない。

もしも「先生」が静を深く愛しているとすれば、「先生」は必ずや静を深く信じているに違いない。

愛の深さと信の深さととは厳密に一致しているに違いないのである。

もちろん、それは、いわば、理想論であつて、私たちの愛には、現実には、さまざまな限界や紛れが付きまとうものである。

それゆえ、私たちの信にも、現実には、さまざまな限界や紛れが付きまとうものなのである。

けれども、ここでは、「先生」は、さらに一步を進めて、「本当の愛」との言葉を用いている。

「本当の愛」とは一切の限界や紛れの入り込む余地のない純粋な、徹底的な、完全な愛のことであろう。

それが、もしも、可能なら、それは、必ずや、私たちの信の最高形態である信仰と一致しているはずと漱石は考えるのであろう。

「本当の愛」や「真の愛」「永遠の愛」との言葉は西洋中世でもよく使われる言葉であつた。それは、たとえ「人への愛」の形をとるときにも、「神への愛」「神への信仰」と密接に結びついているものであつたことが想起される。

このようにして、「愛とは何か」についての実に透徹した理解があるように見える「先生」が、なぜ嫉妬に駆られて、無一の親友であるKを裏切るような行為に及んだものであろうと不思議に思われる。

私が思うには、これほど透徹した愛の理解を持つ人物なら、にごつた理解を持つ人物とは異なり、嫉妬に駆られて、親友を裏切るような悪行には及ばないものである。

現に、「先生」には次のような「きわめて高尚な愛の理論」もある。

「はたしてお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へ言ひ出す価値のないものと私は決心していたのです。恥をかかせられるのがつらいなどというのとは少しわけが違います。こつちでいくら思つても、向こうが内心ほかの人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのはいやなのです」（下三四）。



このような「高尚な愛の理論」から、嫉妬に起因する裏切り行為などは生じてくるものであろうか。

「先生」は、ここで、みずからを「きわめて高尚な愛の理論家」と自称しつつも、同時に、「もつとも迂遠な愛の実行家」とも自称しているから、理論と実践の分裂として片付けられるのであろうか。

けれども、その分裂は、この場合、まるで目もくらむほどの断崖絶壁のようである。

「先生」が嫉妬に駆られる最初の場面(下二六)に立ち返って論じてみよう。

「今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう十分にきざしていたのです」(下二七)。

すでに述べたように、『「こころ」』の他の場面も含めて、このときの「先生」の心中を推し量ると、ジェラシーに特有の、驚き、不安、恐れ、悲しみ、落胆、空しさ、怒り、苦しみ、絶望、後悔、疑惑、迷い、劣等感、不自信、焦り、憂鬱……など、実に多くの情念がせめぎあい、渦巻いているように見える。

嫉妬とは何か。

私たちが嫉妬を分析すると、それはきわめて複雑な情念で、上に列挙した、実にさまざまな感情から成り立つものであることがわかる。嫉妬の名の下に、私たちの心の中では、実に多くの情念がせめぎあい、渦巻いているのである。

けれども、私たちがみずからの心をよくよくのぞいてみれば、実は、その渦巻きは二つあり、二つの中心を持つ二つの渦巻きが、私たちの心の中で激しくぶつかりあい、しぶきをあげて、とどろいていることがわかる。

かつてスピノザはジェラシーの本質を「愛憎」としてとらえた。

二つの渦巻の中心とは愛と憎しみである。

そして、その愛憎に「ねたみ」が結びついている。

「もしも、愛されるものが、自分がかつて独占したと同じか、むしろそれ以上に緊密な友愛の絆によって、他人と結びつくのを人が想像するならば、愛するもの自身に対しては憎しみを感じ、他人に対してはねたむだろう」(スピノザ『エチカ』三・三五)。

「ねたみと結びついた、愛するものに対するこの憎しみはジェラシーと呼ばれる。それは、したがって、ねたまれる他人の観念をとまなつて、愛と憎しみから同時に生じる心の動揺に他ならないのである」(スピノザ『エチカ』三・三五、schol.)。

「先生」の愛憎とは、静への愛憎であり、「先生」のねたみとはKへのねたみである。

愛と憎しみとは正反対の情念であるのに、「先生」の心の中には、その愛と憎しみが同居しているのである。

Kから静への恋を告白されたとき、「その時の私は恐ろしさのかたまりといましようか。または苦しさのかたまりといましようか、なにしろ一つのかたまりでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に堅くなったのです。呼吸する弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです」(下三二)。

さて、その愛は、「先生」の言う「きわめて高尚な愛の理論」に照らせば、「本当の愛」「真の愛」という名に値するものであろうか。

「私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです」と言うわりには、「先生」は、ずいぶん、「真の愛」や「深い信」にはそぐわないようなさまざまな感情にさいなまれていたのではないだろうか。すなわち、驚き、不安、恐れ、悲しみ、落胆、空しさ、怒り、苦しみ、絶望、後悔、疑惑、迷い、劣等感、不自信、焦り、憂鬱などに。

これらは、「真の愛」や「深い信」の相関者であるというよりも、「幼い愛」や「浅い信」の相関者であるのではないだろうか。

愛と憎しみとは相反するものであろうし、不自信などは「深い信」とは、けっして、相容れないものである。

デカルトなどは、かなり手厳しく、こう言うくらいである。

「その妻に関して嫉妬する男は軽蔑される。というのは、それは、彼が彼女を正しいしかたで愛していない証拠だからであり、彼自身と彼女について悪く思っている証拠だからである。彼が彼女を正しいしかたで愛していない、と私が言うのは、もし彼が彼女に対する真の愛(une vraie amour)を持っていたならば、彼女に不信をいだくという気持ちになどならなかったはずだからである。彼が愛しているのは、本当は、彼女ではなくて、彼女を独占することのう

ちにある（と彼が想像している）幸福を愛しているのにすぎないのである」（デカルト『情念論』一六九）。

通常、嫉妬は愛の証拠と言われる。

「先生」もまた次のように言う。

「これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の反面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいでゆくのを自覚しました。その代わり愛情の方もけつして元のように猛烈ではないのです」（下三四）。

けれども、デカルトが「嫉妬は真の愛の証拠ではない」と言っていることに十分注意する必要がある。

本当に嫉妬は、常に、愛の証拠であろうか。

もしも、デカルトが正しいとすると、嫉妬が、結婚以来、しだいに薄らいでいくとしても、妻への真の愛が猛烈でなくなるとはかぎらないということになる。

或る時、或る所で、三人の若者が出会った。それは「先生」と静とKとである。

Kは「先生」の手引きと援助で、その家に入居してきた新参者である。

「先生」は、その家での共同生活をおくるうち、しだいに静がKに、そしてまた、何と、Kも静に!!傾斜していくようすを目にする。

そして、「先生」の、常日頃、見るところ、Kは自分よりもすぐれているのである。

「勉強も私の倍ぐらいいましたでしょう。そのうえ持って生まれた頭の質（たち）が私よりもずっとよかったです。……同じ級にいるあいだは、中学でも高等学校でも、Kのほうが常に上位を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があったくらいです」（下二四）。

「真の愛」「永遠の愛」とは何であろう。

それは簡単には言えないことであるが、この場面に引き付けて言うところであらう。

そのとき、もしも「先生」が静を本当に愛しているなら、「先生」は静の幸福を願って生きていたはずである。

もちろん、「先生」にも自己愛はあるはずなので、「先生」は同時に、自分の幸福をも願って生きていたはずである。

もしも静の幸福と自分の幸福とが一致しているなら、どんなに幸福な人生が実現されることであらう。

けれども、もしも、静の幸福と自分の幸福とが一致していないとしても、「先生」はだれを責めることもないはずである。静を責めることも、またKを責めることも、そしてまた自己自身を責めることもない。

それはだれの罪でもない。

それゆえ、「先生」は静を傷つける必要も、またKを傷つける必要も、そしてまた自己自身を傷つける必要もないのである。

静にも自分の幸福を願って生きる権利があるし、Kにもまた同様である。

もしも「先生」が本当に、心の底から静を愛しているとしたら、次のように推論することができるはずである。

もしかしたら、静の幸福は自分と共にではなく、Kと共にあるのではないかと。

我が国を代表する第一級の作家・夏目漱石の名作『こころ』がKの自殺と「先生」の自殺とで終ることに私は不満である。

イギリス文学を代表する第一級の作家・シェークスピアの名作『オセロ』が他殺と自殺とで終わっていることも私には解せない。

嫉妬が引き起こすといわれる他殺も自殺も、私から見ると、けつして悲劇でも何でもなく、誤解と推論の間違いがもたらす、まったく不必要な蛮行にすぎない。

「先生」の常日頃の「高尚な」信念に照らせば、Kから静への愛を打ち明けられた後には、ただ機会を得て、静に「どちらを愛していますか」と尋ねるべきではなかったのだろうか。

もしも「先生」が静を愛し、そしてまた、Kも静を愛しているとき、最後に結論を導くことができるのは静にはかならない。

もしも、そのとき、静が「Kを愛しています」と答えるなら、「先生」は以下のKの言葉とそっくり同じ祝福の言葉をKと静に対して述べてから、立ち去

ることができよう。

「奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最もおちついた驚きをもって迎えたらしいのです。…奥さんが「あなたも喜んでください」と述べた時、彼は始めて奥さんの顔を見て微笑をもらしながら、「おめでとうございます」と言ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子をあげるまえに、また奥さんを振り返って、『結婚はいつですか』と聞いたそうです。それから『何かお祝いをあげたいが…』と聞いたそうです」(下四七)。

では、Kはこの祝福の言葉を文字通りの意味で語ったのかといえ、けっしてそうではないことが、彼の自殺からわかる。

この祝福の言葉の中は、実は、恐ろしいほどに空洞であった。

一体、これから自殺をする人が、実質的に、他者を祝福することなどできるものであろうか。

実際には、「先生」と静の近未来の結婚はKに対して破滅的な効果を及ぼしたのである。

そしてまた、Kの死は、やがては連鎖して、「先生」の死をもたらず破滅的な効果を及ぼすのである。

けれども、上で私が分析したように、Kの死は論理的にはまったく不必要であった。

また「先生」の死も論理的にはまったく不必要であった。

それでは、なぜKは自殺したのか。

また「先生」もなぜ自殺したのであろうか。

二人の自殺の真の原因は何であらうか。

一体、漱石ほど明晰な人が、二人の自殺は、嫉妬の構造に照らすと、論理的には不必要であることに少しも気づかなかったものであろうか。

「同時に私はKの死因をくり返しくり返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありませんが、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kはまさしく失恋のために死んだものとすぐきめつけてしまったのです。しかしだんだんおちついた気分、同じ現象に向かつてみ

ると、そうたやすくは解決がつかないように思われてきました。現実と理想の衝突——それでもまだ不十分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で寂(さむ)しくてしかたがなくなった結果、急に処決したのではなからうかと疑いだしました。そうしてまたぞつとしたのです。私もKの歩いた道を、Kと同じようにたどっているのだという予覚が、おりおり風のように私の胸を横ざりはじめたからです」(下五三)。

ここには、二人の自殺の真の原因が暗示されていると思う。

一人目の死は「失恋ゆえの死」であり、二人目の死は「失恋ゆえの死を親友にもたらしたゆえの死」である、という解釈は表面的である。

上で、Kに関して用いられている表現「現実と理想の衝突」には十分に注意する必要がある。

この区別を「先生」自身に当てはめてみると、「先生」が、みずからを「きわめて高尚な愛の理論家」と自称しつつも、同時に、「もつとも迂遠な愛の実際家」とも自称していたことが思い起こされる(下三四)。それは、理論と実践の分裂として言い換えることができよう。

Kに関しては、「——それでもまだ不十分でした」と明確に言い切られている。

それゆえ、「先生」自身に関してまた、「——それでもまだ不十分でした」と明確に言い切ることができよう。

ここからは夏目漱石に焦点を絞って論じてみる。

ここで、漱石はなぜ「先生」に自殺させたのか、と言い換えてみよう。

漱石は、『「ころ」から一年後に書かれた最晩年の随筆『硝子戸の中』(一九一五)において、或る女性が「悲しい身の上話」をしに訪れたとき、最後には

「そんなら死なずに生きていらっしゃい」と人生肯定的に助言する(七)が、その直後では、こう自分自身に語っている。

「不愉快に充ちた人生をとぼとぼ辿りつつある私は、自分の何時か到着しなければならぬ死という境地に就いて常に考えている。そうしてその死というものを生よりは楽なものだとはかり信じている。ある時はそれを人間として達

し得る最上至高の状態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊（たつと）い」。

こういう言葉が近頃では絶えず私の胸を去来するようになった」（八）。

なぜ漱石は、或る女性に対して、最後には「そんなら死なずに生きていらっしやい」と人生肯定的に助言したにもかかわらず、その直後に、「生は死よりも尊（たつと）い」と人生肯定的に述べずに、「死は生よりも尊（たつと）い」と人生否定的に述べたのであろうか。

「斯（か）くして常に生よりも死を尊いと信じている私の希望と助言は、遂にこの不愉快に充ちた生というものを超越する事が出来なかつた」（八）。

「常に生よりも死を尊いと信じている私の希望と助言」を漱石はその晩年の作品において初めて書き記したものであろうか。

それとも初期の頃から、実は、描いていたのであろうか。

漱石の初期の作品『夢十夜』（一九〇八）の第二夜には「瓜実顔」の、不思議な、まさに夢のような女性が登場して、静かな声で「もう死にます」と言い、さらに「百年待っていて下さい」と言う。

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」。

自分は只待っていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮（あざやか）に見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱した様に、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた」。

この女性がかつて漱石が出会つた現実の誰かを暗示しているのであろうか。漱石は、ここで、愛する人の死を悲しく、美しく描いている。

では自分自身の死についてはどうか。

同じ『夢十夜』の第七夜には、大きな船に乗って旅をする旅人の話が語られている。

彼には天文学への関心もないし、神への信仰もない。

また外国人の旅客が多い船内に、特に親しい友人もいないようである。

この大きな船は、毎日、毎夜、絶え間なく、黒い煙を吐いて進んで行くのだが、一体、どこへと向かつて進んで行くのか、船員に聞いてもわからない。

「こんな船にいるよりいっそ身を投げて死んでしまおうかと思つた」。

或る晩、とうとう「自分」は、あたりに人のいないことを見はからって、船から飛び降りる。

「ところが——自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなつた。心の底からよせばよかつたと思つた。けれども、もう遅い。自分は厭でも応でも海の中へ這入らなければならぬ。ただ大変高くできていた船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。……そのうち船は例の通り黒い煙を吐いて、通り過ぎてしまつた。自分はどこへ行くんだか判らない船でもやっぱり乗っている方がよかつたと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔と恐怖を抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行つた」。

漱石は、このようにして、愛する人の死と自分自身の死とを初期の頃からその作品の中で描いて見せている。

最後にまた、晩年の著作『硝子戸の中』に帰り、そこから、私の尊敬する漱石の残した最高の言葉が記されている末尾の文章（三九）を引用する。

ここには、たとえて言えば、マルクス・アウレリウスの『自省録』にも匹敵するほど透徹した高い境地が示されている。

アウグスティヌスの『告白』やルソーの『告白』にも触れた後で、「それをいくら辿つて行つても、本当の事実は人間の力で叙述できる筈がないと誰かが云つた事がある。……私の罪は、——もしそれを罪と云い得るならば、——頗（すこぶ）る明るい処からばかり写されていたらう。其所に或る人は一種の不快を感じるかも知れない。然し私自身は今その不快の上に跨がって、一般の人類を広く見渡しながらかつて微笑しているのである。今までつまらない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡し、あたかもそれが他人であつたかの感を抱きつつ、矢張り微笑しているのである」。

## The Structure of Jealousy in *Kokoro* by NATSUME Soseki

ARAI Yoichi

*Department of Philosophy and Ethics*

### Abstract

NATSUME Soseki is one of the greatest novelists in Japan. Especially his masterpiece : *Kokoro* appears partially in almost all Japanese textbooks of high schools.

I try to investigate into the structure of jealousy in *Kokoro* by NATSUME Soseki according to the fruit of my paper : "Jealousy" 1983.

My paper proceeds as follows.

- 1 Prologue
- 2 Why did 'my teacher' kill himself ?
- 3 Why did 'K' kill himself ?
- 4 Why did 'my teacher' kill himself really ?

**Key words** : love, jealousy, suicide